

利平ぐりの収量向上技術について

1 試験のねらい

利平ぐりは、食味は良いが収量が少ないのが欠点である。そこで収量向上の要因を知るために、施肥量の多少及びせん定の強弱が生育や収量にどのように影響するかを検討した。

2 試験方法

農業試験場内の14年生樹を用いて、昭和56年は標肥区(10a当たり窒素成分13kg)と多肥区(窒素成分20kg)を設けた。昭和57年は標肥普通せん定区と、多肥強せん定I区(間引せん定)、多肥強せん定II区(56年3月カットバックその後間引せん定)、多肥強せん定III区(55年3月樹冠量の半分を縮伐しその後間引せん定)とした。昭和58年からは、標肥普通せん定区、標肥強せん定I区(間引せん定)、標肥強せん定II区(56年3月カットバック後間引せん定)及び多肥普通せん定区、多肥強せん定I区(間引せん定)、多肥強せん定III区(55年3月樹冠量の半分縮伐その後間引せん定)の6区とした。多肥区は窒素26kg(10a当たり成分)とし各区3~4樹を試験に供した。

3 試験結果及び考察

生育量の総新しょう長は、標肥区より多肥区で90cm長かった。また、生育の推移をみると、多肥区は標肥区より遅くまで伸長しているのがうかがわれた(表-1)。

果実きゅう果の発育は、全重が8月20日、いが重9月10日、子房重は8月30日、胚重は9月10日頃から多肥区で大きくなる傾向であった(図-1)。

強せん定区は種枝率、結実母枝数及び雌花着生数が、普通せん定より増加する傾向であった。標肥区と多肥区の比較では、普通せん定で多肥の効果が認められるが、強せん定では明らかでなかった(表-2)。

単位面積当たり収量は、強せん定により高まる傾向であった。収量増加に対する多肥の効果は、普通せん定では認められたが、強せん定ではその効果は顕著でなかった。一果重については区間差が明らかでなかった(表-3)。

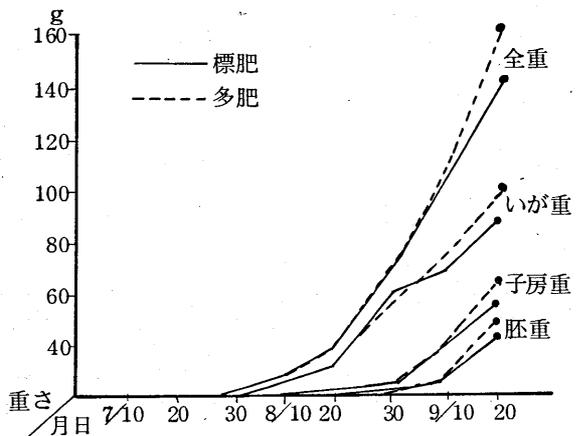


表-1 新しゅう長の推移

(昭56. cm)

項目区	調査月日										
	5/10	20	30	6/10	20	30	7/10	20	30	8/10	
総新しゅう長	標肥	310	430	610	590	640	670	680	680	680	680
	多肥	330	440	530	630	700	730	750	770	770	770
新しゅう長	標肥	9	13	15	17	19	20	20	20	20	20
	多肥	10	13	15	18	20	21	21	22	23	23

注 1.結果母枝10本当たり 2.せん定は、標肥・多肥とも軽い間引せん定

表-2 種枝率、結果枝数、雌花着生数

項目区	種枝率 %			結果母枝1本当たり結果枝数 (本)			結果枝1本当たり雌花着生数 (個)			
	58年	59年	60年	58年	59年	60年	58年	59年	60年	
	普通せん定	46.4	46.1	75.1	1.3	1.3	1.4	1.8	1.8	1.6
標肥	強せん定I	75.0	54.2	78.0	1.5	1.4	1.6	2.8	1.9	2.1
	強せん定II	51.3	69.2	69.9	1.8	1.7	1.5	3.6	2.3	2.0
普通せん定	70.5	56.1	67.3	1.6	1.5	1.5	2.8	1.9	1.8	
多肥	強せん定I	73.6	65.8	72.4	1.5	1.7	1.5	2.6	2.4	1.9
	強せん定III	73.8	59.6	75.6	1.7	1.8	1.6	2.8	2.5	2.2

注 結果枝数、雌花着生数実平均、結果母枝100本調査

表-3 樹冠1㎡当たり収量

項目区	58年			59年			60年			
	総収量	上物収	一果重	総収量	上物収	一果重	総収量	上物収	一果重	
	Kg	量 Kg	g	Kg	量 Kg	g	Kg	量 Kg	g	
普通せん定	0.356	0.260	16.6	0.227	0.159	21.1	0.407	0.311	21.1	
標肥	強せん定I	0.391	0.290	15.9	0.220	0.167	23.0	0.481	0.416	20.1
	強せん定II	0.348	0.303	18.5	0.387	0.317	18.3	0.442	0.369	24.9
普通せん定	0.391	0.279	16.1	0.252	0.193	22.1	0.392	0.279	19.8	
多肥	強せん定I	0.330	0.226	17.5	0.274	0.185	21.2	0.497	0.324	19.1
	強せん定III	0.343	0.270	17.5	0.285	0.206	22.3	0.418	0.287	19.1

4 成果の要約

利平ぐりの種枝率、結果枝数及び雌花着生を高め、単位面積当たり収量を増加する方法として、カットバックや毎年強い間引せん定を行なうことが効果的である。また、ごく軽い間引程度の普通せん定の場合には多肥による効果も認められる。

(担当者 船田 貞夫・松浦永一郎)